クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

―◆―演奏会情報―◆―

2012．3．16（金）　大阪交響楽団第164回定期演奏会

（会　場）　大阪　ザ・シンフォニーホール

（曲　目）　［1］Ａ・ヘンゼルト　ピアノ協奏曲　※
　　［2］Ｆ・シュミット　交響曲第4番

（指　揮）　寺岡　清高

（管弦楽）　大阪交響楽団

※（ピアノ）　長尾　洋史

―◆―鑑賞記―◆―

［はじめに］

今夜の演奏会、本来は音楽監督である児玉宏氏による「披瀝“グラズノフとプフィッツナー”」というシリーズの第2弾が予定されていたのだが、児玉氏の体調不良により、急遽、演目及び指揮者が変更となった。残念ではあるが、仕方がない。
では、どんな演奏会だったか、振り返ってみることにしよう。

［1］Ａ・ヘンゼルト　ピアノ協奏曲　※

初めて耳にする作曲家で、どんな曲だろうと思っていたが、すぐに気に入った。わたしは、コンサートが始まる前に、パンフレットに目を通さないようにしている。先入観が入ると、自分の感性で聴けないからだ。演奏を聴いた後で、確かめ、「へぇ！」と驚いたり、「やっぱり！」と納得したり、そんな楽しみ方をしている。素人ならではといっても、良いかもしれない。
この曲の作り手であるアドルフ・フォン・ヘンゼルトは、1814年にドイツのシュバーバッハという町で生まれ、ピアニストとして活躍し、「ドイツのショパン」と呼ばれるに至ったが、1838年にロシア・サンクトペテルブルクで開いた演奏会を機に、ロシア皇帝の皇后の要請によりその地にとどまり、宮廷ピアニストとして奉職することとなる。
演奏を聴いていて、どことなくドイツ的な響きを感じたのだが、間違っていなかった。第2楽章では、ややマイナーで重々しい曲調になるのだが、この辺りは、なるほどロシア的な要素が加わったことに起因しているといえる。

各楽章を少し振り返ってみると、第 1 楽章は、雄大な響きの中に情熱的なピアノ演奏が加わる独特な感じが、聴く者を惹きつける。続く第 2 楽章は、ゆったりとしたテンポで、ピアノの響きを存分に楽しませてくれる。とても美しいメロディの後には、不安や緊張を掻き立てる和音が押し寄せ、再び美しいメロディが現れる、といった具合に展開していく。魅惑的な楽章といえる。そして、第 3 楽章は、リズミカルで、オーケストラとピアノの掛け合いがうまく表現されており、壮大なフィナーレを迎える。良い曲という表現は、陳腐だが、それ以外に言いようがない。こんな名曲が、あまり演奏されていないとすれば、勿体ない。是非、また聴いてみたいものだ。

ピアノの長尾洋史氏は、50 歳になろうかというベテランだが、恥ずかしながらわたしは知らなかった。ただ、今回聴いて、ひと目惚れというか、ひと耳惚れした。その卓越したテクニックと表現力は、これまでに聴いたピアニストの中でも、群を抜いているように思う。こんな素晴らしい日本人ピアニストがいたとは、驚きである。ソロを聴いてみたい。風貌は、焼き鳥屋の大将といった感じだが、全く繊細で幅広い音の響きを再現し、音楽に対する心意気のようなものが伝わってきた。実に素晴らしい演奏で、満足したことを記しておきたい。

［2］F・シュミット　交響曲第 4 番

こちらは、今回、プフィッツナーの交響曲の代わりに演奏された曲。2 年前の定期演奏会で、取りあげられた作品だった。が、わたしは、全く記憶していなかった。それもそのはず、2 年前の手帳を見ると、「寺岡さん、あっさりしすぎで面白味にかける。」と酷評していた。

作曲家フランツ・シュミットについて、少し紹介しておこう。シュミットは、1874 年スロバキアで生まれ、ウィーンで活躍する。作曲の世界において、幾多の賞を獲得し、ウィーンを代表する作曲家の一人と讃えられたが、ナチスの協力者と目され、厳しい非難を受けることとなる。同時に、彼の作った曲も伏せられていくこととなるのだ。ここ数年、にわかに注目を集めてきていることは、彼の才能の奥深さを物語っている。

この交響曲は、楽章ではなく、第 1 部、第 2 部という形で構成されており、第 1 部から第 4 部まで続けて演奏される。第 1 部の冒頭、トランペットの寂しげなソロで始まり、少しずつマーラー的な曲感が広がってくる。シュミットは、若いころ、ウィーンの宮廷歌劇場でマーラーのもとでチェロの演奏活動を行っていたというから、このように感じたことは、間違いでなかった。寺岡氏の指揮は、いつになく力が入っていて、なかなかの熱演だった。続く第 2 部は、葬送行進曲的な色合いに包まれていた。シュミットの精神世界を垣間見ることができる。第 3 部は、一転、スケルッツォの華やいだ軽快なリズムが、第 2 部の雰囲気を打ち消す。フィナーレのあと、静かに第 4 部が始まり、その冒頭、ホルンがソロで第 1 部の冒頭に似たメロディを奏でる。わぁーっと賑やかになったあと、静かにソロを演奏するのは緊張するだろうな。ソロ演奏のあと、重奏となるが、ここが少しコケたように思う。バイオリンの美しいメロディーが続き、トランペットのソロで幕を閉じる。物語感あふれる交響曲で、「奥深い」という表現がぴったりだ。もちろん、どの作曲家も考え抜いて曲を書いているとは思うが、シュミットのこの交響曲は、練りに練って書きあげられたものだという印象を受けた。

さて、2 年前と比べて、今回は・・・。実に充実した演奏だったと思う。大阪交響楽団とともに、寺岡清高氏も成長した証であり、両者の関係がとても良好であることの表れだ。素晴らしい曲を、演奏を、聴かせてくれた。

［おわりに］

急遽、演目その他が変更となり、わたしも定期演奏会に 10 年近く足を運んでいるが、指揮者の交代は初めてだった。準備期間が少ない中、たいへん良い内容の演奏会で、大満足。児玉氏のプフィッツナーを聴く楽しみが、少しあとに延びただけで、次に聴ける日を楽しみにしたい。

寺岡氏は、2004 年に大阪交響楽団の正指揮者となり、2011 年から常任指揮者に就任した。10 年の付き合いということになる。ここ 1 年の充実ぶりは、常任指揮者への就任がキッカケかもしれない。

次の演奏会が、少し待ち遠しい。